

# 『元朝秘史』のモンゴル語漢字音訳における 音以外要素の関与について

—モンゴル語音baの表記を事例として—

孟 達 来

はじめに

1. 同じモンゴル語音に対応する異なる漢字について
2. 「巴」「把」「罷」の音訳された語の中での位置分布
3. 語頭に現れる「把」
4. 語末に現れる「罷」
5. 同音異義語の音訳における「把」「罷」「巴」

おわりに

はじめに

『元朝秘史』は、モンゴル語を漢字によって音訳した文献である。『元朝秘史』は、チンギス・ハーンの一伝記を中心に物語った文献であり、その原本は13世紀にウイグル式モンゴル文字で書かれたとされる。但し、その原本は今には伝わらず、現存するのは14世紀後半に中国の明朝において訳された、「漢字訳本」とよばれるものである。

漢字音訳とは、簡単に言えば、漢字音をもって、対象となる言語の音を表記することである。とはいえ、漢字とは、「音」以外に、また「形」と「義」の要素をもつ書記体系であるため、歴史上、漢字音訳においては、漢字の音だけでなく、その他の要素（本稿では「音以外要素」と名づける）も取り入れようとした試みがなされてきた。そのような音訳作品として、『元朝秘史』の漢字音訳がよく知られている。

『元朝秘史』の音訳における「音以外要素」の関与の問題に関する先行研究として、次のものがある。

陳垣（1934）では、『元朝秘史』のモンゴル語の漢字音訳の特徴を、ほぼ同時代のモンゴル語漢字音訳文献である『華夷訳語』と比較し、音訳方式は音だけでなく、意味も考慮して漢字を選んでいる点に特徴があると指摘している。なお、陳垣（1934）では、モンゴル語と音訳漢字との意味関連を分類して論じている。

服部四郎（1946：117-127）では、『元朝秘史』の音訳において、同じ音に対応する異なる漢字を出現回数の「多・中・少・稀」の順で配列し、そのうち意味に関連するとされる漢字にはマークを付けている。服部四郎（1946）では、『元朝秘史』の音訳に用いられた563種類の漢字が掲げられ、そのうち、128種類の漢字が意味関連漢字として認定されている。

栗林均（2006）では、『元朝秘史』モンゴル語のu/üの表記に用いられる漢字の書き分けの原則を検討している。モンゴル語のu/üの表記に用いられる漢字が、『華夷訳語』には「兀」1種類だけであるのに対して、『元朝秘史』では「兀」「嗚」「岫」「渚」「[門+乞]」<sup>1)</sup>「砮」という6種類も使われていることを指摘した上、これらの漢字の使用状況を全巻にわたって網羅的に調査し、それらの使い分けの実態を明らかにした。そして、これらの漢字の使い分けは、すべて「モンゴル語の意味を考慮して、意味に関連した漢字を使う」ためのものであると述べている。

先行研究によって、音訳においては、音だけでなく、意味との適合も考慮して音訳漢字を選択していることが明らかになった。また、同じ音の表記に用いられる異なる漢字の使い分けの問題も明確にされた。ところが、『元朝秘史』の音訳における音以外要素の関与について、全ての問題が明らかにされたとは言えない。本稿では、先行研究を踏まえた上で、音訳漢字の「音以外要素」の観点から、『元朝秘史』におけるモンゴル語音baの表記を事例として、漢字音訳における「音以外要素」の関与の諸相を示すことにする。

## 1. 同じモンゴル語音に対応する異なる漢字について

漢字は「一漢字＝一音節」といった音節構造を持つ。よって、漢字の音訳上の性格は、基本的には「一漢字＝モンゴル語一音節」といった対音のパターンをとる。また、漢字音訳では、原則として、同じ音はいつも同じ漢字で表されると考えられる。

ところが、『元朝秘史』におけるモンゴル語の漢字音訳に関しては、同じ音の表記に同じ漢字ではなく、異なる幾つかの漢字が用いられる場合がある。こうした対音関係を、「モンゴル語音：漢字」＝「1：n」と示すことにする。

それでは、なぜ「モンゴル語音：漢字」＝「1：n」といった対応関係が存在するのか。以下では、この問題に対して、モンゴル語のbaといった音の表記を事例として、検討してみる。

既に述べたように、漢字には「音」以外に、また「形」と「義」の要素がある。そこで、音訳漢字の機能には、「音のみ」を表す側面と、「音+その他の要素」（本稿では「音+ $\alpha$ 」と名づける）を表す側面という2つの側面が考えられる。とはいえ、音訳漢字の選択は、まず音表記を前提とするのは言うまでもない。そこで、同じ音の表記に用いられる異なる音訳漢字のうち、出現回数が比較的高く、且つ「音のみ」の表記に用いられた漢字を「一般用字」と見なすことができる。これに対して、「音+ $\alpha$ 」の表記に用いられる漢字は、音以外要素を表示するという特定の意図で使用されるので、このような漢字を「特定用字」と見なすことができる。

例えば、モンゴル語のbaという音の表記には、表1に示される5つの漢字が用いられる。

表1のデータが示すように、baを表す漢字のうち、「巴」「罷」「把」の3つの漢字が比較的に多く用いられ、これら3つの漢字による表記回数（1563回）は、モンゴル語音baの全表記回数（1569回）の99.62%を占めるのである。これに対して、「八」「杷」の2つの漢字は稀に使われ、baを表す全表記の僅か0.38%のみである。頻度から見ると、モンゴル語のbaを表す漢字は「頻用」の「巴」「罷」「把」と、「希用」の「八」「杷」といった2つのグループに分けられる。

以下では、この2つのグループに沿って、モンゴル語のbaを表す漢字の様態を考察して

表1 モンゴル語のbaを表す漢字の出現状況

	漢字	回数(延べ)	比率(%)
1	巴	745	47.48
2	罷	587	37.41
3	把	231	14.72
4	八	5	0.32
5	杷	1	0.06
合計		1569	100

みる。

(1) 稀用の「八」「杷」

まず、稀に用いられた「八」と「杷」を説明しておく。全巻における「八」と「杷」の用例は、次の表2と表3の通りである。

表2と表3のデータが示すように、「八」と「杷」のうち、「八」が第10巻に1回だけ現れるのを除けば、すべて第1、第2巻に現れている。『元朝秘史』において、第1、第2巻とそれ以降の巻の間で、音訳用字の点で異なることが認められる。この問題に関して、小澤重男(1994: 220)は、「第1、第2巻とそれ以降の巻は、成立された時期が異なる」とする。

まず、音訳漢字「八」に関しては、同じ中世モンゴル語の漢字音訳文献である『華夷訳語』(甲種本)において、モンゴル語のbaの表記には、「八」がよく用いられている。一方、『元朝秘史』の第1、第2巻は、それ以降の巻に比べて、音訳漢字の使用上、『華夷訳語』とよく似ているところがある。そこで、『元朝秘史』の第1、第2巻に集中的に現れる「八」と、『華夷訳語』によく使われる「八」との間で、何らかの関連性があるように考えられる。

次に、音訳漢字「杷」に関しては、「杷」が人名の表記に1回だけ現れる。服部四郎(1946)では、この「杷」を「把」の誤字であるとしている。但し、この「杷」が、barim\_šiyiratu\_qabičiという人名(1回のみ出現)を識別するため、意図的に用いられた可能性も考えられる。

表2 「八」の用例<sup>2)</sup>

	モンゴル語	音訳	傍訳	回数	出所
1	ki l ba ra	乞  <small>勅</small>  八  <small>舌</small> 刺	容易行	2	1:14/1-14/6、1:14/1-14/6
2	ba ra q sa t	八  <small>舌</small> 刺  <small>黒</small>  撒  <small>揚</small>	廢盡了的	1	2:11/2-11/5
3	ja ba	札 八	崖縫	1	2:13/7-14/2
4	tu l ba s	秃  <small>勅</small>  八 思	倒	1	10:36/9-37/8

表3 「杷」の用例

モンゴル語	音訳	傍訳	出所
ba rim_ ši yi ra tu_ qa bi či	杷  <small>舌</small> 林_ 失 亦 刺 秃_  <small>中</small> 合 必 赤	児名	1:25/7-25/10

このように、音訳漢字「八」と「把」は、出所からしても、出現回数からしても、モンゴル語音baに対応する漢字の中で、例外的なものとなる。

（2）頻用の「巴」「把」「罷」

以下では、頻度からして、頻繁に用いられた「巴」「把」「罷」といった3つの漢字に注目し、これらの漢字の使い分けについて分析してみる。

もし、「音」のみを表す漢字と「音+α」を表す漢字の関係を、対立する言語的単位として扱うなら、「より一般的に用いられる漢字」は「無標 (unmarked)」となり、「特殊に用いられる漢字」は「有標 (marked)」となる。

例えば、モンゴル語のaiという音の表記には2種類の漢字が用いられるが、そのうち、「埃」（頻度：29）は、一般的に用いられているため「無標」であり、「唉」（頻度：1）は、「嘆息」を意味するaiという語の表記に用いられているため「有標」である、とみることができよう。

ところで、表2のデータが示すように、baを表す漢字のうち、「巴」と「罷」の頻度は両方とも高く、且つ数字的に近い関係にあるため、上述の「無標／有標」分けの原則が成り立たない。

それでは、音訳漢字「巴」と「罷」は両方とも一般的に用いられていた漢字であろうか。もしそうでなければ、その違いは何であろうか。その答えは、単なる頻度からは得られない。

音訳形における漢字の配列はモンゴル語の形態構造の中で意味を有する。そこで、音訳漢字の使用についての分析は、音訳されたモンゴル語の形態の中で観察すべきであると考ええる。

2. 「巴」「把」「罷」の音訳された語の中での位置分布

服部一郎（1946：117-127）は、『元朝秘史』の全音訳漢字を「多・中・少・稀」<sup>3)</sup>といった頻度順で並べ、かつ「語頭・語中・語末」<sup>4)</sup>という使い分けのマークを付けている。膠着語の構造をもつモンゴル語に関しては、その表記漢字の音訳されたモンゴル語の中での位置分布を、相対的に「語頭・語中・語末」という観点から分析するのが、一つの有効な方法・視点である。

『元朝秘史』において、baを表す漢字「巴」「把」「罷」を、モンゴル語の漢字音訳形の「語頭・語中・語末」に沿って考察した結果、次の表4のデータが得られた<sup>5)</sup>。

表4 baを表す「巴」「把」「罷」の語の位置における分布

音訳漢字	全回数 (延べ)	語頭	語中	語末
巴	745	562 75.44%	165 22.15%	18 2.42%
罷	587			587 100%
把	231	208 90.04%	20 8.66%	3 1.30%

表5 《巻き狩り》を意味するaba「阿把」

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数
1	a ba	阿 把	圍獵	2
2	a ba- la- a su	阿 把- 刺- 阿 速	圍獵-呵	2
3	a ba- la- ju	阿 把- 刺- 周	圍獵-着	1
4	a ba- la- qu	阿 把- 刺- 中忽	打獵-的	1
5	a ba- la-n	阿 把- 闌	打圍	2

表6 《巻き狩り》を意味するaba「阿巴」

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数
1	a ba- da ča	阿 巴- 荅 察	圍獵-行	1
2	a ba- la- t qun	阿 巴- 刺- 惕 中渾	圍獵-您	1
3	a ba- la- a su	阿 巴- 刺- 阿速	圍獵-呵	1

表4から分かるように、「巴」が「語頭」「語中」において優勢的に現れ、「把」が「語頭」において優勢的に現れ、「罷」が「語末」にのみ現れる。また、3つの漢字のうち、「巴」と「罷」の分布上の相違点が浮かび上がってくる。つまり、「出現頻度が高く、且つ数字的に近い関係にある」この2種類の漢字は、語形態における位置が異なるのである。

まず、断っておきたいのは、モンゴル語音baの表記に一番多く使われた「巴」という漢字に関しては、その使用には音以外要素の関与が認められず、よって、「巴」は音表記のみに用いられた「一般用字」であると判断される。

次には、音訳漢字「把」の動きを事例の中で分析してみる。

『元朝秘史』において、モンゴル語の《巻き狩り》を意味するabaは、多くの場合、「阿把」という漢字で表記される（上の表5を参照）。

これらの音訳形において、音訳漢字の「把」と、aba《巻き狩り》という語の間には、意味のつながりが見受けられない。この「把」を特用したのは、おそらく《巻き狩り》を意味するabaという語幹を形式上識別するためであろうと考えられる。

但し、この《巻き狩り》を意味するabaは、「阿巴」という漢字で表される例外があることを指摘しておきたい（用例は表6を参照）。

上の表5に示されているのは、モンゴル語のaba《巻き狩り》の音訳に「把」が用いられたケースであるが、これら音訳形における「把」の位置分布は「語中」または「語末」になっている。以下では、比較的多く用いられた「語頭」の「把」を取り上げてみる。

### 3. 語頭に現れる「把」

前頁の表4のデータが示すように、音訳漢字「把」が「語頭」には208回、「語中」には20回、「語末」には3回現れる。「語頭」に圧倒的に用いられているのが、「把」の配置上の特徴である。以下、「把」の全用例を出現回数の順位で並べると、次の表7の通りとなる。

まず、「語頭」の「把」の使用状況を全体的に見てみよう。次の表7が示すように、「語頭」に「把」が配置される音訳形には、bari-「把<sup>里</sup>-」《持つ、つかまる》が104回、ba'atur「把阿秃<sup>兒</sup>～把阿都<sup>兒</sup>」《英雄、称号（人名の一部を成す）》が66回、それ以外の語が38回現れる。bari-とba'aturという二つの語の音訳における「把」だけが、「語頭」に現

表7 音訳漢字「把」の全用例

	モンゴル語	漢字音訳	傍訳	回数
1	ba ri-	把 <sup>舌</sup> 里-	拿, 把	104
2	ba a tu r	把 阿 秃 <sup>舌</sup> 兒~把 阿 都 <sup>舌</sup> 兒	勇士, 人名	66
3	ba ra-	把 <sup>舌</sup> 刺-	廢盡, 殺, 了, 喫了, 飲了	10
4	a ba~abala-	阿 把~阿 把 <sup>刺</sup> -	圍獵, 打圍	15
5	ba ra l du-	把 <sup>舌</sup> 刺 勒 都-	議定, 定, 商議定	4
6	ba ri l du-	把 <sup>舌</sup> 鄰 勒 都-	相搏, 共拿	3
7	ba ra un	把 <sup>舌</sup> 刺 温	右	3
8	ba ru la s	把 <sup>舌</sup> 魯 刺 思	一種每, 種每, 種	3
9	ba ri a s	把 <sup>舌</sup> 里 阿 思	刑禁	2
10	ba yi l du-	把 亦 勒 都~把 因 勒 都-	對陣	2
11	ba ru la	把 <sup>舌</sup> 魯 刺	種名	2
12	ba r tan	把 兒 壇	名	2
13	a ba l du-	阿 把 勒 都-	相搏	2
14	ba ru la tai	把 <sup>舌</sup> 魯 刺 台	名	1
15	ba ru~ba ru q	把 <sup>舌</sup> 魯~把 <sup>舌</sup> 魯 <sup>黑</sup>	猛的	2
16	ba dai	把 歹	名	1
17	ba r qa qun	把 兒 中 合 渾	名	1
18	ba sa a la-	把 撒 阿 刺-	管攝	1
19	ba	把	并	1
20	ši ba	失 把	亂箭	1
21	sam ba ju	三 把 周	抽着	1
22	ja l ba ri ju	札 勒 把 <sup>舌</sup> 里 周	禱告着	1
23	hu r ba ju	忽 <sup>舌</sup> 兒 把 周	翻着	1
24	qu r ba ni	中忽 兒 把 泥	三箇行	1
25	dau u ba r	禱 兀 把 兒	聲教	1

れる「把」(208回)の81.73%を占めるのである。音訳漢字「把」が「語頭」において優勢的に現れる主な原因は、bari-《持つ、つかまる》と、ba'atur《英雄、称号》という語が『元朝秘史』においてかなり頻繁に使われているためである。

次には、bari-《持つ、つかまる》とba'atur《英雄、称号》以外の38語における「把」の状況についてみる。これらの38語のうち、20語は動詞語幹である。これらの動詞語幹は、bara-「把<sup>舌</sup>刺-」《終える、終わる、殺す》(10回)、baraldu-「把<sup>舌</sup>刺<sup>勒</sup>都-」《共に定める》(4回)、barildu-《もみ合う》(3回)、bayildu-「把亦<sup>勒</sup>都~把因<sup>勒</sup>都-」《戦う》(2回)、basa'ala-「把撒阿刺-」《管理する》(1回)である。これらの動詞以外の18語は、氏族名・人名(10回)、baru~baruq「把<sup>舌</sup>魯~把<sup>舌</sup>魯<sup>黒</sup>」《猛烈な》という形容詞(2回)、barias《禁、刑》(2回)、bara'un「把<sup>舌</sup>刺温」《西、右》という名詞(3回)、ba《並びに》という助詞(1回)である。

表7の出現回数から見れば、音訳漢字「把」はモンゴル語の動詞語幹の表記によく用いられる傾向が読みとれる。つまり、動詞であるため、意図的に「手偏」の「把」を用いたのではないかと考えられる。

以下では、音訳漢字「把」が一番多く用いられたbari-「把<sup>舌</sup>里-」《持つ、つかまる》とい

表8 bari-の表記に用いられた「把」の用例

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数
1	ba ri- ju	把  <sup>舌</sup> 里- 周	拿着	48
2	ba ri- ya	把  <sup>舌</sup> 里- 牙	拿咱	5
3	ba ri- ba	把  <sup>舌</sup> 里- 罷	拿了、拿了也	3
4	ba ri- qu	把  <sup>舌</sup> 里-  <sup>中</sup> 忽	拿的	4
5	ba ri- tu qai	把  <sup>舌</sup> 里- 秃  <sup>中</sup> 孩	把者、拿者	6

表9 bari-の表記に用いられた「巴」

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数	出所
1	ba ri- ju	巴  <sup>舌</sup> 里- 周	拿着	2	1:16/3-16/5、1:32/9-33/2
2	ba ri- ya	巴  <sup>舌</sup> 里- 牙	拿住 <sup>6)</sup>	1	2:18/5-18/7

う語幹について取り上げてみよう。

『元朝秘史』の全巻にわたって、モンゴル語のbari-「把<sup>舌</sup>里-」《持つ、つかまる》という語幹は全107回出現する。そのうち、「把」が用いられるのは104回であり、全bari-の音訳の97.20%を占め、「巴」が用いられるのは僅か3回（2.80%）のみである。紙幅の関係で、「把」の全用例を挙げることはできないので、全用例の中からいくつかの用例を挙げてみると、上の表8の通りである。

上の表8が示すように、モンゴル語のbari-《持つ、つかまる》という語の音訳には「把」が用いられ、その傍訳として「把」又は「拿」が付けられている。baの表記において、一般用字である「巴」が当てられるべきであるが、bari-《持つ、つかまる》という語を表すとき、一般用の「巴」ではなく、「把」を選択しているのが明らかである。この「把」の漢語における意味を調べてみると、《持つ、握る、つかむ》という意味を指すのであり、それはまた傍訳の「把」または「拿」にも合致するのである。すなわち、音訳漢字と傍訳漢字の間でも、字義上の一致性が見られる。この点から、bari-《持つ、つかまる》の音訳に「把」を選択したのは、モンゴル語の「意味」と音訳漢字の「字義」を合わせるためであったとみることができよう。

但し、モンゴル語のbari-《持つ、つかまる》の表記には、「把」のみが用いられたわけではない。bari-を語幹とする35語のうち、2語は「把」ではなく、「巴」が用いられている（上の表9を参照）。

これら「巴」を用いた3つの語の出現は、『元朝秘史』の第1、第2巻に限られている。既に述べたように、『元朝秘史』の第1、第2巻と、それ以降の巻の間には、音訳用字の点で相違がある。bari-の「巴<sup>舌</sup>里-」という音訳形は、上述の諸巻の間における相違と平行するものである。

結論としては、「bari-の場合：ba→把」という表記において、次の2種類の関係が成り立つと考える。

①漢語：把（pa）→モンゴル語：ba（音的關係）

②漢語：把《持つ、とる、つかむ》→モンゴル語：bari-《つかむ、握る》（意味的關係）

この2種類の関係において、①の場合は、「漢語：pa→モンゴル語ba」といった「音」レベルでの対応関係を形成しており、②の場合は、「形態素」レベルでの対応関係を形成して

いるとみることができよう。

#### 4. 語末に現れる「罷」

表5の語の位置における分布から、モンゴル語のbaを表す漢字のうち、「罷」という漢字はいつも語末に現れていることがわかる。紙幅の関係上、「ba→罷」という表記の全用例を挙げることはできないので、試みにいくつかの用例を挙げてみると、次の表10の通りである。

一方、baを表す漢字のうち、「罷」はbaだけでなく、beという音も表す。それでは、「ba→罷」の場合は「語末」に現れるが、「be→罷」の場合は、どのような分布をしているのか。この問題に関して、beを表す漢字の中で考察してみる。次の表11は、『元朝秘史』におけるbeを表す漢字の分布を示すものである。

表11が示すように、beの表記には「別」と「罷」の2種類の漢字が用いられている。そのうち、「別」は「語頭」「語中」「語末」のいずれにも現れるが、「語末」に現れることは少ない。これに対して、「罷」は「語末」のみに現れる。この「be→罷」の用例も多いので紙幅の関係上、全用例の中からいくつかの用例を挙げてみると、次の表12の通りである。

なお、『元朝秘史』において、音訳漢字「罷」は一律にモンゴル語動詞過去形接尾辞-ba/be<sup>7)</sup>の音訳に用いられている。そのうち、「ba→罷」という表記は全589回現れ、それら用例の傍訳に関しては、傍訳が「了」となっているのは535例、「了也」となっているのは53例、「毎」となっているのは1例だけである。つまり、傍訳が「了」となっているものが圧倒的である。

表10 「ba→罷」の用例

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数
1	a bu- ba	阿 不- 罷	要-了	6
2	ba ri- ba	把 舌里- 罷	拿-了、拿-了也	3
3	bo lu- ba	孛 魯- 罷	做-了	22
4	yo r či- ba	約 兒 赤- 罷	去-了	8
5	ya bu- ba	迓 步- 罷	行-了	8

表11 beを表す「別」「罷」の語の位置における分布

表記漢字	全回数（延べ）	語頭	語中	語末
別	498	298 59.84%	166 33.33%	34 6.83%
罷	523			523 100%

表12 「be→罷」の用例

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数
1	ü je- be	兀 者- 罷	見-了	2
2	ü gü le- be	鳴 話 列- 罷	説-了	5
3	neü ü- be	耨 兀- 罷	起-了	5

一方、音訳漢字「罷」に関しては、漢語には「罷」が《やめる、休む》という意味のほか、助詞として、《終わる、終える》という意味も表す。動詞の過去形接尾辞-ba/-beに「罷」を当てたのは、接尾辞の意味に、音訳漢字の字義をあわせるためである。

モンゴル語のbaとbeの表記は、一般に、

$$\begin{cases} \text{ba} \rightarrow \text{巴 (pa)} \\ \text{be} \rightarrow \text{別 (pi\epsilon)} \end{cases}$$

となるが、モンゴル語の動詞過去形接尾辞-ba/-beの場合、その表記は、

動詞過去形接尾辞-ba/-be → 罷 (pa)

となる。つまり、異なる音形であっても、同じ漢字を当てるため、音の対応において、モンゴル語の異なる母音であるaとeには、漢語の1つの母音aが当てられることになる。もし対音の面から見れば、音訳において漢字の意味への重視により、音表記の精確さが影響されるのである。

## 5. 同音異義語の音訳における「把」「罷」「巴」

『元朝秘史』において、モンゴル語の同じ音形をもつ異なる語に、異なる漢字を当てるケースが認められる。上にみてきた「把」「罷」「巴」という3つの漢字の同音異義語の音訳における用例は次の通りである（表13を参照）。

なお、この同音異義語であるabaが、形態構造上次のように分けられる。

$$\begin{cases} \text{aba 阿把} \left[ \text{「傍訳：圍獵」《巻き狩り》} \right] \text{ (名詞)} \\ \text{aba} < \text{a+ -ba} \begin{cases} \text{阿罷} \left[ \text{「傍訳：住了」《いた》} \right] \text{ (主動詞)} \\ \text{阿巴} \left[ \text{「傍訳：有來」《いた》} \right] \text{ (副動詞)} \end{cases} \end{cases}$$

つまり、abaが《巻き狩り》を意味するとき、「把」が用いられ、abaが動詞として現れるとき、「罷」または「巴」が用いられる。更に、動詞といっても、abaが主動詞になるとき、「阿罷」と音訳され、abaが副動詞になるときは、「阿巴」と音訳されている。

もし、モンゴル語のbaという音を表す音訳漢字の全体からみた時、「ba→巴/罷/把」において、「巴」は一般用字として使われ、音訳において基本音対応を成すと見ることができると。これに対して、「罷」は動詞過去形接尾辞の音訳に使われ、「把」は動詞語幹または特定の語の音訳に使われており、この点で、「罷」と「把」はいずれも意図的に用いられた

表13 同音異義語abaにおける「把」「罷」「巴」の用例

	モンゴル語	漢字	傍訳	回数	出所
1	a ba	阿 把	圍獵	2	7;15/3-15/6, 7;18/1-18/5
2	a ba	阿 罷	住了	2	1;15/6-15/10, 7;46/10-47/3
3	a ba	阿 巴	有來	3	1;32/5-32/7, 1;32/5-32/7, 2;21/8-22/4

「特定用字」であると見ることができる。abaという同音異義語の音訳において、音訳漢字「把」と「罷」と「巴」は、それぞれ形態素レベルで機能している。そこで、この場合は、普段一般用字として使われる「巴」が、上に見たabaという同音異義語の範囲において、特定の役割で用いられたのではないかと考えられる。

## おわりに

以上の考察から、以下の点を提示できよう。

(1) 『元朝秘史』における「モンゴル語音：漢字」＝「1：n」といった対応関係は、漢字の「音＋α」といった表記機能に関わっている。モンゴル語のbaを表す「把」と「罷」の使用状況が示すように、「音＋α」における「α」には、モンゴル語の観点からすれば、少なくとも、「語彙の意味」と「文法的意味」が関与し、漢字の観点からすれば、「義」の要素が関与している。

(2) 音訳において、「音以外要素」に関連する「把」と「罷」に関して、「把」は表記される語の「語幹の意味」に関連しており、「罷」は表記される語の「接尾辞の意味」に関連している。つまり、「音＋α」において、「音（対音）」は音節のレベルで機能するが、「音以外要素」は、形態素のレベルで機能しているのである。そこで、『元朝秘史』における漢字表記の性質は、完全に「表音的」ではないといえる。

(3) 同じbaという音を表すのに、「巴」は音表記のみに用いられ、「把」と「罷」は、「音」と「それ以外の要素」の表記に用いられた。このことから、モンゴル語の漢字表記は、単なる「音訳→対音」といったプロセスを越えて、「音訳→対応関係」といったプロセスを形成するのである。こうした対応関係を、「音節レベルでの対応関係」と「形態レベルでの対応関係」とに分類することができる。

(4) 同じ音を表記する異なる漢字のうち、基本音対応をなす一般用字も、特定の使用範囲において、特定の機能を果たすケースが見受けられる。例えば、上の「同音異義語」の音訳における「把」「罷」「巴」に取り上げたように、abaは同じ音形を有するが、異なる意味で使われる語であり、意味の違いに応じて、「把」「罷」「巴」が使い分けられている。つまり、音表記の面で一般用字として使われる「巴」は、abaという「同音異義語」の音訳の際に、異なる語を識別する役割を持たされたと考えられる。

## 注

- 1) 組み合わせ漢字「門+乞」は、『元朝秘史』の原典に現れる閉（門の中に乞）という特殊文字の代入として用いたものである。
- 2) 用例のモンゴル語ローマ字転写と漢字音訳において、縦棒「|」は、漢字に表されるモンゴル語音の区切りを示す。音訳漢字の右下における小書きの「勅」「黒」「楊」などは、モンゴル語の音節末子音を表すために用いられた漢字である。音訳漢字の左上における小書きの「舌」「中」は、漢語には存在しないモンゴル語音を表すために用いられた発音補助記号である。出所の数字は、『元朝秘史』の「卷;丁/行」を表す。
- 3) 服部四郎（1946：117-127）において、音訳漢字の使用回数に関しては、5回までのものを「稀」、15回までのものを「少」、30回までのものを「中」、それ以上のものを「多」と見なしている。
- 4) ここでの「語頭」「語中」「語末」とは、漢字のモンゴル語音訳形における配置を指す。

- 5) 本稿のデータ集計に用いたコーパスは、自作の『元朝秘史』モンゴル語と音訳漢字のパラレルコーパスである。
- 6) モンゴル語のbariyaという語の音訳において、「把|舌里|牙／傍訳：拿咱」（表8の2を参照）と、「巴|舌里|牙／傍訳：拿住」（表9の2を参照）という異なる音訳形（それぞれ「把」と「巴」を使用）が存在する。なお、音訳の異なりに平行して、傍訳も異なっている。
- 7) 『元朝秘史』におけるモンゴル語動詞過去形接尾辞に関して、「罷」で音訳されている接尾辞を-ba/-be、-bai/-beiと2種類に転写する必要があるが、本稿では、音訳漢字「罷」の原音から考慮して、-ba/-beと1種類に転写する。

## 参考文献

- 小沢重男『元朝秘史全釈』（上）（中）（下）風間書房1984～1986
- 小沢重男『元朝秘史全釈続攷』（上）（中）（下）風間書房1987～1989
- 小澤重男『元朝秘史』岩波書店1994
- 河野六郎『文字論』三省堂1994
- 裘錫圭『文字学概要—[前編]漢字の誕生とその発展—』（早稲田大学中国古籍文化研究所文字学研究班訳）早稲田大学中国古籍文化研究所2004
- 栗林均「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」『言語研究』第121号（日本言語学会）2002
- 栗林均「『華夷訳語』と『元朝秘史』におけるモンゴル語の動詞過去形語尾=ba/=be, =bi, =bai/=beiを表す漢字について」『東北アジア研究』第9号、東北大学東北アジア研究センター2005
- 栗林均「『元朝秘史』におけるモンゴル語音訳漢字書き分けの原則—u/üを表す漢字を事例として—」『東北アジア研究』第10号、東北大学東北アジア研究センター2006
- 栗林均『『元朝秘史』傍訳漢語索引』東北大学東北アジア研究センター2012
- 栗林均・确精扎布『『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター2001
- 斎藤純男『中期モンゴル語の文字と音声』松香堂2003
- 陳垣『元秘史譯音用字攷』國立中央研究院歷史語言研究所1934
- Bayar *mongγul-un niyuča tobčiyān (1)(2)(3)*, öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy\_a, kökeqota, 1980
- 服部四郎『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂1946
- Halliday, M. A. K. *The Language of the Chinese "Secret History of the Mongols"*, Blackwell Publishing, 1959
- 村山七郎「元朝秘史と華夷訳語との成立の先後に関する問題の解決」『東方学』第22号1961
- Ligeti, L. *Histoire secrète des Mongols* (Monumenta linguae Mongolicae collecta I) Budapest, 1971

